

# 「スポーツ教育」の概念検討のための 方法論的視座に関する一考察

森田啓之\*

(平成4年9月30日受理)

## 1. 研究の目的

教育の一般目標達成への貢献を目指した「身体を通しての教育(education through the physical)」としての体育に対する批判や、社会におけるスポーツ現象の隆盛に伴って、新しい考え方として「スポーツ教育」「運動教育」「プレイ教育」などが主張され始めて20年余りになる。なかでも「スポーツ教育」はわが国において、教科の名称変更問題とも関係しながら大きく注目されてきた。しかしながら、「体育ではなぜだめでスポーツ教育でなければならないのか」という疑問<sup>1)</sup>に代表されるように、今日においても「スポーツ教育」という用語自体が十分な市民権を獲得しているとは言い難い。勿論、これまでも「スポーツ教育とは何か」という本質的・理念的問題に対する取り組みが全くなされなかったわけではないが、研究者によってその概念が様々な形で理解されており、見解の一致が見られない<sup>2)</sup>。この原因としては概念検討の方法論自体に問題が内在していると考えられ、今後、教科名称変更の議論を発展的に進めていくために、「スポーツ教育」概念をどのように理解するかは重要な問題であり、そのための確固たる方法論が模索されなければならないであろう。

「スポーツ教育」概念を検討する際の方法として最も典型的なものは、「スポーツ教育とは『スポーツへの教育(education to sport)』である」「スポーツ教育は『スポーツの中の教育(education in sport)』である」などの定義に見られるように、in, through, about, to, ofなどの「前置詞」を用いた説明である。この前置詞を用いた概念把握の方法は「体育(=身体教育: physical education)」概念を定義した場合にも見られた。ある時代には「体育とは身体の教育(education of the physical)である」との立場で身体の発達が強調され、また次の時代には「体育は身体を通しての教育(education through the physical)である」として全人的発達が目指されたのは周知の通りである。このように、概念は目的・目標とも密接に関係しており、概念を明確にすることが教科の方向性を規定するとも言えよう。

そこで、本研究は、「スポーツ教育」の概念をめぐる議論のうちで、特に前置詞によって語と語、すなわち「スポーツ」と「教育」の論理的関係が説明された主張を取り上げ、そこに付与された意味内容を整理、検討することによって、概念検討の方法論として前置詞を用いることが有効であるかを明らかにすることを目的とした。

## 2. 研究の方法

上記の目的を達成するために、次のような手順で研究は進められた。まず、以下の先行文献から、特に「スポーツ教育」の概念を前置詞によって説明した例を抽出した。なお、「スポーツ教育」自体が1970年頃より主張され始めた経緯を考慮に入れ、調査対象は1970

\* 兵庫教育大学第5部(生活・健康系教育講座)

年以降のものとした。

- a. スポーツ教育学研究, 体育学研究などの学術雑誌および大学紀要
- b. 体育科教育, 学校体育, 体育の科学などの定期刊行物
- c. スポーツ教育に関する著作

次に, それぞれ抽出された記述を「方法」が備えるべき条件から検証することによって, 前置詞の使用が概念検討の方法として有効性, 妥当性を有しているかを明らかにし, さらにそこに含まれる問題点を解決するための視座を提示した。

### 3. 前置詞によって捉えられる「スポーツ教育」概念

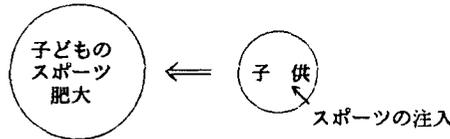
先行文献を検討した結果, 「スポーツ教育」という熟語(複合語)を構成する「スポーツ」と「教育」の2語の関係を前置詞でもって説明する例は多く抽出されたが, ここでは先行主張のうちの典型例を取り上げることにする。また, 「概念」という言葉ではなく, 「基本的性格」あるいは「理念」といった言葉で表現されている場合も見られたが, 基本的にスポーツ教育の「意味内容(=内包)」を明らかにする点では同義と考え, それらも「概念」と同様に扱われた。

#### 3.1 「スポーツ教育」概念についての片岡<sup>9)</sup>の分類

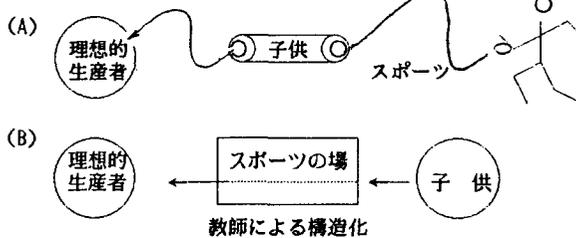
わが国で最も早く「スポーツ教育」という用語を用いたと思われる<sup>9)</sup>片岡は「スポーツ教育」の概念を体育との定義の関連でみて(傍点, 引用者), 次の3つの思考パターンに分類する(図1参照)。すなわち,

- 1) スポーツの教育(Education of Sports)
- 2) スポーツをとおしての教育(Education through the Sport)
- 3) スポーツへの教育(Education to the Sport), である。

#### 1) Education of Sports



#### 2) Education through the Sport



#### 3) Education to the Sport

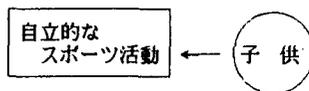


図1 スポーツ教育の概念(片岡, 1972)

1) の「スポーツの教育」は「スポーツを目的とした教育」であり、「ルールを教え、スポーツ技能を教え、スポーツを見たり行ったりできるようにするものである」。彼は「ここでは子どもは小型の大人であり、既成の精選されたスポーツ技術を注入されて、大人のスポーツマンへと肥大する（傍点、引用者）」と述べ、「スポーツの教育には、無批判的にスポーツを注入する態度がある」と警鐘を促している。次の「スポーツをとおしての教育」は2つのパターンに分けられる。(A)においては、教師が子どもを縄（スポーツ）を通して社会に送り出す過程として捉えられる。そこでは教師は直接的積極的に子供を既定の目標へと追い立てる。また、(B)は入学から卒業までの面倒をみる、すなわち、その間の場を教師が構造化して、間接的に設定した目標へと導いていくと捉えられる。両者に共通するのは、いずれも「教育目標を労働する国民において」いる点、「青少年期ではスポーツを行い、成人では労働を行うという区別」が存在する点であると言う。

次に、「国家的な目標がスポーツのねらいを決定するという考え方が行きづまってくると、スポーツ教育の目標は、スポーツ内にとりこまれなければならないようになる」。そうして、スポーツ活動が「自律的なもの」として捉えられ、「いろんなスポーツ種目から抽象した一般概念としてのスポーツへと子どもを教育していくことになる『スポーツへの教育』がもっとも現代の状況に合う」と結論づける。この片岡の分析は、「スポーツ教育」概念を通示的に (diachronic) 分析、検討したものであり、教科におけるスポーツと教育の関係の変化および今後の方向性をうまく説明している。

また、竹之下<sup>9)</sup>は、社会的変化に対応して、スポーツによる教育からスポーツへの教育へ変化すべきと主張し、丹羽<sup>9)</sup>もスポーツによる教育と共にスポーツ生活への教育をより強く主張せざるを得ないと論じている。

### 3.2 高橋による「スポーツ教育」概念の検討

一方、諸外国での新しい体育の動向を紹介するなど、わが国におけるスポーツ教育の議論の中心的人物である高橋は、その概念についても様々なところで言及している。以下、彼の論文、著書を手掛かりとしながら、その主張内容を整理することにする。

彼はまず、「遊戯とスポーツ教育—スポーツ教育の理念構想」(1979)<sup>9)</sup>という論文において、「スポーツの教育」という概念を提示する。

スポーツは何かのために役立つ手段価値（機能）を併せもっているが、スポーツ教育の主眼は、何よりもスポーツそれ自身が備えている本質的特性を評価し、これを教科の成立基盤にするとところにある。すなわち、スポーツ教育とは『スポーツを教える』ところにその基本的性格が求められるのであり、換言すれば、それは、『スポーツの教育』(Education of sport)として概念化できる。<sup>9)</sup>

さらに、この「スポーツの教育」という概念の中に、1) スポーツの本質的特性である遊戯性に着目した「遊戯教育としてのスポーツ教育」という側面、2) スポーツが人間の運動 (menschlich Motorik) として現象する点に、独自の人間的意味と教育学的可能性を認める「運動教育としてのスポーツ教育」という側面が設定され、両者が実践において統一的に理解される必要性が述べられている。<sup>9)</sup>

また、彼は今日のスポーツ教育が課題とすべきことが「スポーツ（生活）への教育」にあるとして、ライフ・サイクルの中にスポーツを位置づけていくことのできる主体の形成を志向している。<sup>10)</sup> 換言すれば、社会のスポーツと教科教育の関連性を一層強固なものにしていこうとする立場である。

その後、高橋はイギリスのアーノルド(Arnold, P.J.)に倣って、スポーツ教育の概念を次のような枠組みで捉え直している。<sup>11)</sup> すなわち、1) スポーツによる教育(education through sport), 2) スポーツの中の教育(education in sport), 3) スポーツについての教育(education about sport)の3つである。詳細な内容については後述するので、ここでは簡単に触れておくに留めるが、1)では従来の「体育」で目指された人間形成的側面、2)は自己目的的活動の意義、3)ではスポーツに関する知識の教育が強調されている。

以上、高橋は新たな考え方を取り込みながら、「スポーツ教育」の概念をより明確にしようとしている。前置詞の用いられ方は、大きくはアーノルドの影響を受ける以前、以後というように分けられよう。しかしながら、用いられる前置詞は変化しているが、スポーツ教育に関する基本的なモチーフに大きな変化は見られない。

#### 4. 前置詞による概念検討の方法論的有効性の検証

3. から明らかなように、「スポーツ教育」の概念は様々な前置詞を用いて説明されている。ここでは各論者の主張を整合しながら、次のような視点を基準として前置詞の使用をめぐる妥当性、有効性を検討していくことにする。

第一は、前置詞が一定の基準で用いられているか、言い換えれば、方法としての客観性を有しているかである。自然科学に代表されるように、方法が客観的である条件としては「結果の再現性」が挙げられる。それは人文科学の領域では必要不可欠な条件でない場合もありうるが、本稿が概念検討の「方法論」を問題にする以上、検討されねばならない点であると考えられる。第二には、前置詞を用いることで概念把握が容易とされるか、つまり、「結果の有効性」である。つまり、本来付与されるべき意味内容が前置詞によって十分に表現されているのかを検証されねばならない。

##### 4.1 前置詞の解釈および使用法の不統一

まず、「スポーツの教育」に対する見解の相違が見られる。前述したように、片岡がそれを「既成のスポーツを子供に当てはめる」立場であると否定的に捉えているのに対して、高橋はスポーツの持つ本質的特性を認め、教科教育の立場から肯定的に「スポーツの教育」を主張しているのである。どちらの立場に正当性があるかについて二者択一的には割り切れないが、特筆すべきは、片岡だけでなく高橋もそして他のスポーツ教育論者にも共通して、その後展開される論旨が決して「スポーツそのものを教えるのではない」という点で一致していることである。高橋の表現を借りれば、「既存のスポーツが固定的、絶対的な文化として学習されるのではなく、言葉の全き意味において『教材』として位置づけられるべき」<sup>12)</sup>なのである。換言すれば、既成のスポーツのルール、技術などをそのままの形で子供に持ち込むのではなく、発育・発達段階などを考慮に入れることの必要性が述べられているのである。すなわち、教科の中でのスポーツという文化と教育の関係についての捉え方は同様でありながら、「スポーツの教育」という枠組で理解される意味内容についての解釈が異なるということは、少なくとも「スポーツ教育とはスポーツの教育である」と定義しただけでは十分ではないということになる。したがって、「結果の再現性」という観点から、前置詞のみを用いた概念検討は方法として不十分となってくる。片岡と高橋の例からも明らかなように、前置詞による定義に加えて、さらに検討すべきものがあると考えられる。

別の例を挙げてみよう。高橋は前述した論文の中で、次のような記述をしている。

「スポーツへの教育」＝「スポーツ的自立」の具体的意味内容は、先に述べた「スポーツの教育」がねらいとしたことがらにほぼ一致するものであることが理解できよう。<sup>13)</sup>

つまり、「スポーツの教育」≒「スポーツ教育への教育」のような表現がなされているが、続いてこうも述べられている。

「スポーツに自立する人間の形成」という目的を、「スポーツの教育」と「スポーツへの教育」という理念的枠組を統合する教科の目的として設定することが可能であろう。<sup>14)</sup>

今度は2つの枠組が別々の側面を担うかのように解釈も可能である。

また、アーノルドに依拠して展開されたthrough, in, aboutの3次元からの「スポーツ教育」概念の把握においては、彼が以前まで主張していた議論との不整合性が見い出される。例えば、以前に彼が遊戯(プレイ)としてのスポーツの本質的特性に関わって学習すべき内容があると認めた「スポーツの教育(of)」の次元が、新しく「スポーツの中の教育(in)」として理解されているのである。さらに、以前の「スポーツの教育」という概念に包含されていた「運動教育」の側面が、新しく「スポーツによる教育」として設定されていることも指摘できる。

以上の議論を整理すると、ofの側面(の意味内容)＝inの側面＝toの側面という関係が成立する。しかしながら、個々の前置詞の元来の意味としてof, in,あるいはtoは全く異なる意味内容を有していることは明らかである。つまり、設定された側面(次元)に付与される意味内容と、ofやinなどの前置詞がどのように用いられたかとの間には何の因果関係も見い出せないのである。このように、前置詞を用いることによって理解が容易になるどころか、議論の混乱を生じさせる原因にさえなってしまうている。したがって、方法論として備えるべき条件の2つの点の両方に抵触することになり、ここにおいて単なる前置詞の使用がほとんど意味を持たないことは明白であろう。

#### 4.2 アーノルドの分類枠組の検討

3.2でも触れたように、わが国におけるスポーツ教育の議論にアーノルド<sup>15)</sup>は大きな影響を及ぼしている。したがって、ここでは直接彼の著書に言及することによって、その前置詞の用い方が客観的であるかを検討することにする。

彼の運動教育の分類枠組みを示したのが図2である。3つの運動の概念のうち、「運動による(を通しての)教育」では従来の体育によって強調されてきた人間形成の側面など、「運動の中の教育」においては運動それ自身に内在する固有の価値(主観的意味)、さらに「運動についての教育」では運動に関する研究から得られた様々な知識(客観的意味)を伝達することが強調されている。確かに、これまで生理学的な発達刺激あるいは社会的・精神的発達を助長する媒体としてしか理解されてこなかった運動文化財(≒スポーツ文化財)をそれ自体価値あるものとして捉え直したという点は大いに評価されるべきである。しかしながら、それぞれの前置詞と意味内容の対応が問題となってくる。例えば、「運動[を通す]」とはどういうことなのだろうか、あるいは「運動[の中]」とはどういうことなのだろうか。3.1でも触れたが片岡のように、「スポーツを通しての教育」についても2つのパターンを認める場合もある。また、「運動[の中]」という表現によって、ある人はアーノルドのように「実際の活動場面」をイメージするかもしれない。一方、ある人は

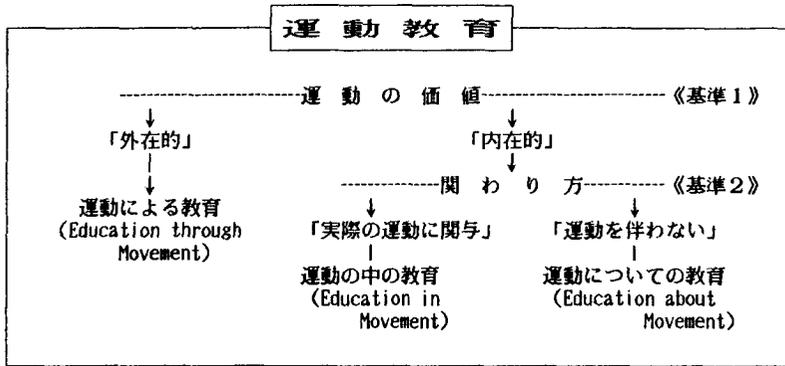


図2 運動教育の3次元の分類基準（カテゴリー）（Arnold,1979）

アーノルドが別次元（運動についての教育）に設定した運動に関する合理的な知識内容まで伴って、「運動〔の中〕」と理解するかもしれない。したがって、前置詞のみでは、結果として「運動〔の中〕」という言葉に関わって、それぞれ個人が様々な表象を浮かべることになるであろう。しかしながら、アーノルドは「運動による教育」は運動を手段的に用いる場合、また「運動の中の教育」は運動を目的的に追求する場合と恣意的に決定しているのであって、その論理関係に必然性は見られないのである。

さらに、アーノルドには誤解を招く記述が見られる。「運動による教育」で目標として設定された「体力や社会的態度」などが、「運動の中の教育」によって達成可能であると述べられ、結果として「運動の中の教育」の優位性が主張されるのである。<sup>16)</sup>「3つの次元はそれぞれ独立したものではなく、相互に関連し、補完しあうものである<sup>17)</sup>」という記述が見られるが、少なくとも「運動教育」という概念が3つの次元から構成されるのである以上、まず各々の内容が明確に分離して認識されなければならない。そのうえで、もし何らかの関係が3つに存在するのであれば、それを明確に提示しておく必要がある。

このように、3つの側面を成立させるに至った分類基準（カテゴリー）は明確である<sup>18)</sup>が、それを代表する前置詞やその意味内容が人により様々に理解されるということは不都合であり、概念検討の方法としてはやはり有効とは言えないであろう。

## 5. 教育概念の検討の必要性－「スポーツ教育」概念の明確化に向けて

これまでの議論で、前置詞のみで概念検討が十分行えるとは言えないことが明らかであろう。したがって、ここでは、「スポーツ教育」概念を明確にする方法論についての一視座を提示してみることにする。

スポーツ教育の主張に見られる特徴は、「スポーツ自体が学習されるに値する文化である」ことを強調する点である。スポーツには「意味形成の可能性<sup>19)</sup>」に代表される内在的価値が存在し、それを教科の成立基盤として主張する。しかしながら、「スポーツ教育」の中核として位置付けられる、意味形成の可能性を基礎とした「スポーツの中の教育」の説明は、授業（教育と呼ばれる状況）でなくとも自らスポーツに関われば経験あるいは獲得できるものである。表現を変えれば、そこでは「スポーツ教育＝スポーツ学習」と置き換えることも可能である。すなわち、自発的にスポーツに関わることと、教育場面とが峻別されていないのである。浅田ら<sup>20)</sup>も既に指摘しているように、「教育効果」ということと「教育」は異なる事象なのである。また、確かに「学習」は「教育」を構成する重要な要素であるが、そのみには還元できない。<sup>21)</sup>「教育＝学習」という公式を認めると、「ス

ポーツ（科）教育＝スポーツ学習＝スポーツトレーニング」という公式さえ成立しかねなくなり、自由に行うスポーツ活動、あるいはクラブ活動でのスポーツ教育と教科でのスポーツ教育とを区別することが困難になってくる。また、このことは、学校教育におけるスポーツ教育の存在自体が危ぶまれることにもなってくる。

この問題を解決するためには、まず「教育」概念を十分に検討することが必要である。「教育」という言葉は日常語として定着しているため、一般に我々はその意味を十分に認識しているつもり、あるいは共通理解が存在していると考えがちだが、実際にはそうではない。「体育」を「スポーツや運動」と同義に捉える議論<sup>20)</sup>などそのよい例である。また、近年の生涯教育などの用語の登場によって、ますます教育という語の「外延」は拡がりつつある。このような現状の中で、「教育」概念をしっかりと認識しておくことは「スポーツ教育」概念の明確化にとっても重要なことであろう。特に、名称変更の問題で対比される「体育（＝身体教育）」も「スポーツ教育」もともに「教育」という共通語を有している点を考えてみても、「教育」「体育」「スポーツ教育」の関係について議論が進められるべきであろう。具体的には、木下<sup>20)</sup>が『教育』をa. 教師対生徒の関係で把握するか、b. 教育意志と被教育者の関係、あるいは、c. 被教育者だけでも内的外的環境の下で教育は成立すると考えるかによって“スポーツ教育”の論郭が著しく変化する」と指摘することからも、「教育」概念をどのように捉えるかは、「スポーツ教育」概念の明確化にとって大きな意味を持ってくる。そのうえで、第二番目として、クラブや部活動のようなスポーツ教育と教科としてのスポーツ科教育の性質の違いを明確にしていかなければならないであろう。現在、大部分の人が両者は異なるタイプの教育であると認識しているが、今回検討した前置詞を用いた見解ではそれを十分に説明することはできていない。

本論の目的は概念検討の方法論について述べることで、具体的な「教育」概念からの検討を意図していないため、これ以上の議論は今後の課題とする<sup>20)</sup>が、単純に前置詞によって概念検討をすることは様々な見解の相違を生み出すもとになりかねないのである。

## 6. まとめ

本研究では、スポーツ教育の概念を明らかにするうえで用いられる前置詞に焦点を当て、それが概念検討の方法として有効であるかを考察してきた。これまでの議論を整理すると以下ようになる。

意図する内容と用いられた前置詞の間には明確な対応関係が見られないため、前置詞による定義だけでは解釈の多様化が予想される。したがって、「スポーツ教育」の概念検討の方法論として、前置詞のみを用いることは有効ではないと思われる。ただ、これまでも「身体の教育」の旗印のもと身体発達が強調されたように、「スポーツ教育」においても、何らかの前置詞を選択して時代的背景などを反映した政策的なスローガン、象徴として用いることは可能であろう。ただ、その際にも、できるだけ統一しておく必要があることは言うまでもない。また、教科としての「スポーツ科」に関する議論として出発したものが、いつの間にか「スポーツ教育」一般の概念の解明に転化しているという問題も指摘される。両者は明らかに別々の枠組で議論すべきなのである。今後は、定義的概念ではなく、記述構成的な概念による検討によって本質的な議論がなされなければならない。

※本稿は日本体育学会第42回大会（於：富山大学）における発表を基に、加筆、修正したものである。

#### 註

- 1) 中森孜郎「スポーツ教育論への疑問」体育科教育, 25-12:25-27, 1977.
- 2) 高橋健夫・稲垣正浩「スポーツ教育の基本問題の検討（Ⅰ）ースポーツ教育の論拠と基本的性格」奈良教育大学紀要, 32-1:149-167, 1983.
- 3) 片岡暁夫「教科教育におけるスポーツ教育」学校体育, 25-14:20-24, 1972.
- 4) 横山は、「わが国で、スポーツ教育という用語が、体育関係の雑誌で最初に登場したのは、1973年、成田の『体育という言葉の変革をめぐる』という学校体育時評の中であろう」と述べているが、筆者の調査によれば、その前に前掲の片岡論文が見られた。（横山一郎, スポーツ教育学と体育教育の関連. 近藤英男編, スポーツの文化論的探究ー体育学論叢（Ⅲ）. タイムス, 1981, pp.178-92.）
- 5) 竹之下休蔵「スポーツと教育ースポーツ教育とは何か」体育科教育, 25-12:2-4, 1977.
- 6) 丹羽劭昭「スポーツ教育の主張ー特に体育科教育の目標構造との関連から」体育科教育, 22-11:12-14, 1974.
- 7) 高橋健夫, 遊戯とスポーツ教育ースポーツ教育の理念構想ー. 丹羽劭昭編著, 遊戯と運動文化. 道和書院, 1979, pp.337-79.
- 8) 同上書 pp.349-50.
- 9) 同上書 p.358.
- 10) 同上書 p.359.
- 11) 高橋健夫「スポーツ教育とカリキュラムーカリキュラム構想のための基礎的論議」学校体育, 37-1:47-53, 1984.  
アーノルドは「スポーツ」ではなく「運動（ムーブメント）」という用語を用いているように、一般に運動教育(Movement Education)の立場と理解される。しかしながら、彼は、スポーツやダンスを総称する「文化概念」として便宜上、「運動」という用語を用いており、「スポーツ教育」に見られる「スポーツ」概念とほぼ同義である。高橋がアーノルドを参考にした点もまさにこの点に関係すると思われる。
- 12) 高橋健夫「スポーツ科教育から学校体育を検討する」学校体育, 31-10:26-30, 1978.
- 13) 前掲書7) p.361.
- 14) 同上書 p.361.
- 15) Arnold, P.J. "Meaning in Movement, Sport and Physical Education" Heinemann, 1979, pp.162-80.
- 16) Ibid., p.180.
- 17) Ibid., pp.177-78.
- 18) アーノルドがどのようなカテゴリーで3つの概念を導いたかについては、拙稿「P. J. アーノルドの『運動教育』論に関する一考察」スポーツ教育学研究, 12-2:65-76, 1992. を参照されたい。
- 19) 前掲書2) など.
- 20) 下記の論文において、スポーツ教育に関する見解を批判する中で、「教育効果≠教育」

という意味の記述が見られる。(p. 7) (浅田隆夫・片岡暁夫・近藤良享「“スポーツ教育”論に関する比較序説—現代日本の所論とS. C. Staleyの所論について—」筑波大学体育科学系紀要, 1:1-14, 1978.)

- 21) 佐藤臣彦「体育概念の原理論的考察(その2) —体育概念の哲学的基礎付け: 終章(後編)—」体育・スポーツ哲学研究, 12-1:29-42, 1990.
- 22) 城丸章夫, 体育と人間形成, 青木書店, 1982, p.10. : 中条一雄, たかがスポーツ, 朝日新聞社, 1981, p.281.など.
- 23) 木下秀明「スポーツ教育の系譜」体育科教育, 25-12:28-30, 1977.
- 24) 佐藤は, 複合語のうち前に置かれた語が限定詞となり, 後の語がその複合語の基本的意味を担う基底詞であることを指摘し, 「教育」概念が曖昧のまま残されるならば, 総体として「体育」概念も曖昧なままであらざるを得ないと, 「教育」概念の検討の必要性を述べ, 「体育」概念を明確にするために「教育」概念の分析から始めている。この記述は「スポーツ教育」概念にも全く当てはまると思われる。  
(体育概念における範疇論的考察—体育概念に関する岸野理論の批判的検討を通して—) 筑波大学体育科学系紀要8:9-21, 1985.

## Abstract

A Study on Methodological Framework for the Purpose of  
Examining the Concept of “Sport Education”

Hiroyuki MORITA

The purpose of this study is to comment on methodological framework in order to make the concept of “Sport Education” clear. Around 1970 “Sport Education” started to be taken notice of as new concept and word replacing “Physical Education”. But at present it is interpreted in various ways, the reasons of which may lie in the methodology itself for the purpose of concept examination.

Therefore, here, I focused on “explanation using prepositions”, one of the typical methods to clarify the concept, i.g. “education to sport” or “education in sport” and examined each contents. I studied the examples using prepositions to begin with, then objectivity as a method and lastly effectiveness of the result.

The summary of the study is as follows:

Firstly, interpretations of prepositions differ from researcher to researcher, and so prepositions are used in different ways. In other words, each researcher uses meanings of prepositions as he wants to. But basically most researchers studied the relationship between “Sport” and “Education” so as to make Sport Education clearer. The contents of the result of their study, however, were almost the same even the prepositions they used were different. Therefore, to use prepositions is not appropriate as a method. It may be all right to use prepositions to show its aim and objective as politic slogan but to do so for the purpose of clarifying the concept at study level is not effective.